名古屋強制動員真相究明ネットフィールドワーク　　飛田雄一

『むくげ通信』２７５号、2016.3.27

３月５日、「朝鮮人強制労働と世界遺産問題」をテーマとする第9回強制動員真相究明全国研究集会が愛知労働会館・東館で開かれた。

強制動員真相究明ネットワークは、 朝鮮人強制労働被害者補償立法をめざす日韓共同行動とともに、昨年６月１１日、「「明治日本の産業革命遺産」の世界遺産登録問題についての声明」を発表している。

日本政府が推薦している「明治日本の産業革命遺産」23 資産の世界遺産への登録について、6 月 28 日からユネスコ世界遺産委員会での審議が行われる予定である。報道で伝えられているように韓国、中国政府からは、そのなかに戦時期に日本政府が植民地・占領地から連行した人びとの強制連行・強制労働の現場を含むことから、登録反対、あるいは、その事実を明示すべきことの意見表明がなされている。／朝鮮人強制連行・強制労働の真相究明に取り組んできた立場から、以下の見解を明らかにする。

１、日本政府は過去に誠実に向き合い、戦時期の強制連行・強制労働についての認識を明確にすべきである。（略）

２、日本政府は、時期区分、登録対象を見直し、強制連行･強制労働の歴史をふまえて申請すべきである。（略）

３．世界遺産の登録ではユネスコの理念である平和や人権をふまえるべきである。（略）

今回の明治産業革命遺産の登録申請問題には、以上のような問題点がある。「1910 年以前の日本の産業化」のみが評価され、被害国の指摘に耳を閉ざしたままで登録がなされてはならない。ユネスコの世界遺産登録においては、このような問題点を克服すべきである。

この声明文でも参考資料として、朝鮮人・中国人・連合軍俘虜の強制労働の実態に関する表をあげたが、今回の研究集会では更にこの問題を掘り下げた。

また、名古屋では名古屋三菱・女子勤労挺身隊訴訟を支援する会が地道な活動を続けており、特別報告として会の小出裕さんからの報告があった。

発表内容は以下の通りである。いずれも充実した内容で、詳細は「資料集」を参照していただきたい。（全 90 頁、700 円、購入希望者は、送料 164 円、合計 864 円を郵便振替<００９３０－９－２９７１８２　真相究明ネット>に送金ください。）

＜特別報告＞

1)「朝鮮女子勤労挺身隊調査（追悼記念碑～99 円、199 円問題まで）を通じて『解決済み論』の誤りを糺す」小出裕さん（名古屋三菱・女子勤労挺身隊訴訟を支援する会事務局総務）

2)「地方儒生の日記から見た強制動員の実態」金敏喆さん（韓国民族問題研究所責任研究員）

＜各地域の報告＞

1）三菱重工業・三菱鉱業と強制労働―長崎の産業革命遺産を中心に　竹内康人さん（強制動員真相究明ネットワーク会員）

2）三菱重工長崎造船所強制動員被害者の被爆者手帳認定について　河井章子さん（韓国の原爆被害者を救援する市民の会）

3）戦時下の三井三池炭鉱と外国人労働者　廣瀬貞三さん（福岡大学）

4）観光スポット、歪められた教育資料として宣伝される『「明治日本の産業革命遺産』八幡製鉄所　兼崎暉さん（八幡製鉄所の元徴用工問題を追求する会）

5）釜石と歴史の継承―世界遺産登録問題から考える　山本直好さん（日本製鉄元徴用工裁判を支援する会）

資料集には、竹内康人さんによる「強制動員に関する史料の紹介」、フィールドワークの資料も掲載されている。

●

２日目（3/6）はフィールドワークだ。大型チャーターバスは満員で補助席も利用した。案内は、名古屋三菱・女子勤労挺身隊訴訟を支援する会の小出裕さんと高橋信さん。

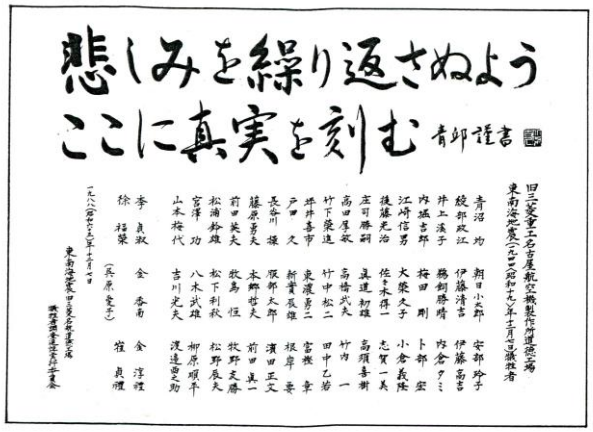
支援する会は、太平洋戦争末期、三菱重工名古屋航空機製作所道徳工場に、ウソと甘い言葉と脅迫で朝鮮半島から連行され、年少で、強制労働させられた元朝鮮女子勤労挺身隊の韓国人関係者が、日本国と三菱重工に謝罪と補償を求めている訴訟を支援している。詳しくは、支援する会ホームページ、

http://www.geocities.jp/teisintainagoya/、および「集会資料集」を参照していただきたい。

フィールドワークでは、勤労挺身隊宿舎跡、道徳工場跡、追悼記念碑、三菱重工殉職碑などを回った。

最初に訪ねたのは、市民グループにより建てられた石碑だ。名南ふれあい病院の敷地内に、病院の好意により建てられている。説明しているのは高橋信さんだ。最後に６名の朝鮮人の名前が刻まれているが、当初三菱が隠していたが、支援する会が調査した事実を突き付けて三菱に認めさせたのだ。最初には日本名しか分からなかったが、韓国での調査等により本名を明らかにした。１名だけ石碑建立の段階で本名が不明だったが、ドラマのような展開があり、本名が判明して石碑も訂正したとのことだ。

石碑からは、昔の工場跡を見ることができる。空襲で多くの方々が犠牲になったが、亡くなった朝鮮人が工場の塀を乗り越えて逃げようとしたが亡くなった現場もすぐ近くにある。



つぎに会社側の「殉職碑」を訪問した。普段は入れない所だが、支援する会と三菱との長年の交渉のなかで、フィールドワークで訪問する時には門が開けられ、犠牲者の名前が刻まれた銅板の入ったケースも鍵もあけられている。

銅板の最後の一枚が以下のものだ。日本人、台湾人の犠牲者の名前は刻まれていたのに朝鮮人犠牲者の名前だけが刻まれていなかったものだ。その後、このように刻まれている。

当日配布された資料のなかの一枚が以下の写真だ。「帰国を喜ぶ少女たち」、「戦争遂行のため強制的に日本に徴用されていた８歳から１４歳までの全羅北道女子勤労挺身隊の帰還前の記念写真、１０月１９日」とある（木村秀明編『進駐軍が写したフクオカ戦後写真集』、1983.4、西図協出版）。素晴らしい笑顔だが、その表情から私たちは多くのことを学ばなければならないと思う。